

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520030

研究課題名(和文) シラー、シェリング、ニーチェの自由論 スピノザ受容を軸として

研究課題名(英文) Ideas of Freedom of Schiller, Schelling and Nietzsche: On the axis of the acceptance of Spinoza

研究代表者

長倉 誠一 (Nagakura, Seiichi)

武蔵大学・総合研究所・研究員

研究者番号：60590015

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：W. E. エーアハルトは、従来のシェリング解釈とはまったく逆で、初期から後期までのシェリング思想の一貫性を提唱した。エーアハルトは、シェリングが終始一貫して「自由」を探求課題としていたと解釈し、またシェリングとスピノザとは異質だと見ている。私は、この二点に関して、エーアハルトのシェリング解釈の適否を検討した。ニーチェについては、スピノザ受容に関する最新の研究を踏まえて、「自由」をめぐる両者の関係を把握した。

研究成果の概要(英文)：In spite of the conventional interpretation of Schelling, Walter E. Ehrhardt proposed the ideological consistency of Schelling throughout his early to late periods. Ehrhardt interprets that Schelling explored into the idea of "freedom" as his coherent research theme, and regards that Schelling and Spinoza differ from each other. I examined the adequacy of the interpretation on Schelling by Ehrhardt on the two points mentioned above. For Nietzsche, I revealed the relations between Nietzsche and Spinoza focusing on the concept of "freedom", in light of the most recent studies on the acceptance of Spinoza.

研究分野：西洋近・現代哲学、とくにカント、シラー、シェリング、ニーチェ、マックス・シェラーの哲学

キーワード：スピノザ主義 汎神論 自由 自然 生命 シラー シェリング ニーチェ

1. 研究開始当初の背景

(1)すでにシラーの「自由」概念、「美とは現象における自由である」という場合の「自由」については、スピノザの「自然本性の必然としての自由」に由来するものであることを、以下の拙論で予想していた。「フリードリヒ・シラーとスピノザ主義」(『武蔵大学人文学会雑誌』第38巻第4号 55頁 82頁 平成19年3月)その後、シラーの「自由」をスピノザ由来のものとして見抜いたF.C.バイザー説の存在を知り、それに依拠して、シラーの「自由」とシェリングの「自由」との関連を検討したのが、「シラーとシェリングスピノザ主義者の美の理論」(『武蔵大学人文学会雑誌』第42巻第3・4号 (159)頁 - (191)頁 平成23年3月)である。

(2)シェリングについては、上記の論文に加えて、「初期シェリングのスピノザ主義」(『武蔵大学総合研究所紀要』第20号、(37)頁 - (59)頁 平成23年6月)ならびに「シェリングの自由論とスピノザ受容」(『武蔵大学人文学会雑誌』第43巻 第2号、169頁 - 196頁、平成23年11月)を発表していた。

(3)科研費研究期間の課題としては、シェリングに関する研究範囲を広げることが課題だった。近年のシェリング研究では、シェリングの歴史批判版ならびにシェリング論集の刊行にともない新たなシェリング像が形成されつつある。こうした現状に対応することが当面の研究課題であった。

(4)またニーチェのスピノザ受容を、最新の研究状況を踏まえて検討することも課題であった。わが国では一番ポピュラーな哲学者なのだが、テキストの厳密な解読にもとづいた研究は決して多くはない。内外の精確な根拠にもとづく研究を踏まえて、スピノザとの関係を検討することが課題であった。

2. 研究の目的

「自由」とは「生命力」の発現であり、これこそ、根本的な意味での自由、本来的自由だと私は考える。この「自由」を、シラーとシェリングとニーチェに見いだすことができるし、この「自由」は「自然本性からの必然性」を「自由」と定義したスピノザに由来する概念であると予想した。この予想が適切なら、三者を哲学史における一つの系譜として捉えることもできる。と同時に、この意味での「自由」概念の重要性を等閑に付している今日の自由論に一石を投じることになる。こうした目論見の確認が研究目的であった。

3. 研究の方法

シェリングならびにニーチェのテキスト解読が中心である。また、学会ならびに研究会において研究情報を得ることも方法といえる。そして、内外の研究者の先行研究をも参照し、テキスト読解をもとに、それぞれの「自由論」を論文としてまとめこと。論文としてまとめるための思索がもっとも重要な研究

方法である。

4. 研究成果

科研費研究に着手する以前から継続していた研究を論文としたものが、「『おのずから』と『みずから』の自由論」(『武蔵大学総合研究所紀要』第21号、(1)頁 (22)頁 平成24年5月)である。この論文では、スピノザの「自然本性からの必然性」としての「自由」は、「おのずから」と「みずから」との統一として捉えうるものだという自説を提唱し、またそれに反する「自由」は、非本来的な「自由」にすぎないと主張した。その場合、「おのずから」と「みずから」の語義を確認するために、九鬼周造による「偶然性」をめぐる一連の論考を検討した。それをもとに、よく取り上げられるI.バーリン、ならびに、バーリンが自分の先行者と認めたバンジャマン・コンスタンを取り上げ、彼らの説く「自由」は非本来的な自由である、と指弾するにいたった。

シェリングについては、とくに「ただ一人のシェリング」を提唱したW. E. エーアハルトのシェリング解釈の適否を検討した。エーアハルトは、未刊であった諸講義の编者であり、現代の代表的なシェリング研究者である。彼は、従来のシェリング解釈、つまり、初期から後期への思想の変遷(移り変わり)をみる解釈を全面的に退け、シェリング思想の一貫性を説いた。その際、シェリングの中心課題を「自由」と捉え、また、シェリングはスピノザとは異質だと捉えた。この二点、つまり「自由」とスピノザとの思想上の関係は、私の科研費研究課題と直結するものなので、エーアハルト説の検討をおこなった。これによって、エーアハルトはシェリングとスピノザの関係性を否定するのだが、この見解はシェリングのテキストに反するものであると確認した。当然、スピノザ由来の「自由」を継承した点を無視したエーアハルトによる自由に関するシェリング説 理解も問題を含むものであると確認した。

エーアハルト説については、「シェリングにおける哲学の究極課題としての「自由」ヴァルター・E・エーアハルト説の検討」(『武蔵大学人文学会雑誌』第44巻第4号 177頁 - 204頁 平成25年3月)と「シェリングにおける「存在に先立つ自由」一八三〇年ならびに一八三一/三二年のミュンヘン講義をもとにして」(『武蔵大学人文学会雑誌』第46巻第2号 119頁 150頁 平成26年12月)この二つの論文において検討した。前者「シェリングにおける哲学の究極課題としての「自由」」においては、エーアハルトの一連の論文や解説を紹介し、これを検討する際には、科研費助成を受ける以前のシェリング研究をもとに、つまり、シェリングによる初期論文から同一哲学期、さらに『人間的自由について』までの展開についての以前の私見をもとにした。後者「シェリ

ングにおける「存在に先立つ自由」においては、エーアハルトによって編集されたシェリングのミュンヘン講義『哲学入門』（1836年）と『啓示の哲学』（1831/32年）を取り上げた。これをエーアハルトは「ただ一人のシェリング」説の論拠としているからである。ニーチェについては、スピノザ受容についての最新の研究を踏まえて、両者の関係を把握した。とくに、スピノザの「コナトゥス」とニーチェの「力への意志」との関係、さらにスピノザの「神の知的愛」とニーチェの「運命愛」との関係を検討することによって、両者の一致点と相違点を明確化した。その点の確認を通じて、ニーチェがスピノザの「自由」を維持できなかったことも明確化した。これを論文としたのが、「ニーチェのスピノザ受容と自由論」（『武蔵大学人文学会雑誌』第45巻第1・2号 121頁 155頁 平成25年11月）である。

この論文では、ニーチェのスピノザ理解の典拠についてまず確認した。M. スキャンデラなどの研究によって、その典拠は、クーノー・フィッシャーによるスピノザ哲学の概説が中心であると確認されているが、スピノザ説がニーチェ思想に生かされたとはいえない。ニーチェの「力への意志」は、スピノザの「コナトゥス」概念を反映したものにはならなかった。この点については、W.S. ヴルツァーによる精緻な研究によって明らかにされているのだが、いずれにせよ、ニーチェの「力への意志」は、人間の「自由」、増大や上昇の力をともなう「生」の別名であるとはいえる。では、ニーチェは、スピノザが「コナトゥス」によって「神の知的愛」の境地へと至ったと同様に、「力への意志」によって「運命愛」の境地に至ったといえるのか。この点については、すでにK. レービットなどによって指摘されているように、スピノザの「自由」へとニーチェは到達できなかったことを確認することになった。

なお本来的自由をどうすれば今日的に適切な形の世界把握の中に取り込みうるのか、について思索を重ねた。マックス・シェーラーその人の哲学は、科研費研究の範囲として当初の予定には入れていなかったが、現代に生きる有限者としての人間にとっての「自由」を論じるには、シェーラーの『宇宙における人間の地位』には適切な指針が示されている。さらに、シェーラーは、スピノザとニーチェについても言及しており、さらにシェリングとの関連から論及されている。論文「マックス・シェーラーにおける本来的自由への道標」（『武蔵大学総合研究所紀要』第24号（1）頁 - （21）頁 平成27年6月）は、スピノザやニーチェやシェリングとの違いを明確にする形でシェーラーを取り上げたものである。この研究は、当該科研費研究の期間内に一応準備したものであるが、この期間内に完成したものではない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

長倉 誠一、マックス・シェーラーにおける本来的自由への道標、武蔵大学総合研究所紀要、第24号、1-21、2015

長倉 誠一、シェリングにおける「存在に先立つ自由」 ―一八三〇年ならびに一八三二―三三年のミュンヘン講義をもとにして―、査読有、武蔵大学人文学会雑誌、第46巻第2号、119-150、2014年

長倉 誠一、ニーチェのスピノザ受容と自由論、査読有、武蔵大学人文学会雑誌、第45巻第1・2号、121-155、2013年

長倉 誠一、シェリングにおける哲学の究極課題としての「自由」 ヴァルター・E・エーアハルト説の検討、査読有、武蔵大学人文学会雑誌、第44巻第4号、177 - 204、2013年

長倉 誠一、『おのずから』と『みずから』の自由論、武蔵大学総合研究所紀要、第21号、1-22、2012年

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

長倉 誠一(NAGAKURA, Seiichi)
武蔵大学・総合研究所・研究員
研究者番号：60590015

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：